

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2018 年

No. 89

2018年8月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2018 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

LGBTsのいじめ被害・不登校・自傷行為の経験率
全国インターネット調査の結果から 1
第8回「青少年の性行動全国調査」(2017年)の概要 .. 8
思いこみのめがね⑤ 13

性教育の現場を訪ねて⑰ 14
多様な性のゆくえ⑱ 16
今月のブックガイド 17
JASEインフォメーション 18

LGBTs のいじめ被害・不登校・自傷行為の経験率 全国インターネット調査の結果から

宝塚大学看護学部教授 日高庸晴

はじめに

わが国で LGBT をはじめとするセクシュアルマイノリティ（以下、LGBTs^{注1}）を対象にした調査研究（公衆衛生領域では行動疫学調査、社会科学では社会調査と呼ばれることが多い）の実施・開始は1990年代後半に遡る。HIV 感染症の国内流行とその拡大はサーベイランス開始以来一貫して男性同性間の性的接触による感染が圧倒的であり、予防のための行動変容や HIV 抗体検査環境の整備といった効果的な予防介入策の立案実施が喫緊の課題であった。

そのため厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業の一環として、ゲイ・バイセクシュアル男性を対象（のちに MSM: Men who have Sex with Men 対象として実施されるようになる）にした HIV/STI 関連知識、性行動、HIV 抗体検査受検歴などを尋ねる質問票調査が実施されるようになった。国内先行研究がほとんどない状況では hard to reach population（接触困難層）であった同集団を対象にサンプリングする

方法として、ゲイバーやクラブなどが密集する都市部繁華街におけるベニユー調査、パーソナルネットワークを活用したスノーボールサンプリング、ゲイサイトにバナー広告の掲出によって調査実施を告知してオンライン質問票に回答を促すインターネット調査などが実施されてきた。

筆者は1998年に同集団を対象にした行動疫学研究を開始、サンプリングを工夫する中、インターネットや SNS の発展と普及といった時勢に合わせてインターネット調査を継続して実施してきた。

HIV/AIDS の流行とその対策の必要性に迫られて開始されたゲイ・バイセクシュアル男性の調査であるが、それ以外のセクシュアルマイノリティの実態を示す数量データはあまりなかった。性別違和を抱える当事者が通うジェンダークリニックにおける臨床データや当事者支援 NPO が実施するインターネット調査の結果などが少しずつ発表されるようにはなってきたが、概して言えることはレズビアンを対象にした調査結果が公になることは圧倒的に少なく、LGBTs 全体の動向を示す研究が不足していた。

その中で、2016年にライフネット生命保険の委託研究として筆者が全国調査を実施するに至った。

◆ 調査の方法

無記名自記式質問票をセキュリティが確保されたインターネット上のhttps領域のホームページに掲示した。研究実施の告知と研究参加者のリクルートは、LGBTsが利用するホームページ、マッチングアプリへの広告掲出、SNSなどによるパーソナルネットワークを通じて行った。回答可能端末はスマートフォン、タブレット、パソコンとし、研究参加にあたっての利便性を高めた。

研究実施期間は2016年7月15日～10月31日であり、宝塚大学看護学部研究倫理委員会による研究計画の審査・承認を経て実施した。

◆ 基本属性

回答総数 16,670 件、有効回収数 15,141 件（海外在住者 77 件含む）、本稿では国内在住者 15,064 件に限定して報告する。

平均年齢は 33.2 歳（10 歳～94 歳）であり、居住地は北海道（4.3%）、東北（4.8%）、関東（22.1%）、東京都（24.5%）、北陸信越（3.1%）、東海（4.0%）、愛知県（5.7%）、近畿（6.7%）、大阪府（9.1%）、中四国（5.4%）、九州（4.2%）、福岡県（4.2%）、沖縄県（2.0%）と関東・東京で半数近くを占めた。

性的指向や性自認に基づくセクシュアリティは、レズビアン（2.5%）、ゲイ（65.3%）、バイセクシュアル男性（10.5%）、バイセクシュアル女性（1.5%）、MTF（1.2%）、FTM（0.7%）、MTX（7.7%）、FTX（2.2%）、その他（8.4%）^{注2}であった。ゲイ・バイセクシュアル男性の回答比率の高さは、研究実施を告知したマッチングアプリの加入者数の多さや広告の訴求力の高さ等であると考えられる。また、筆者が長年にわたり調査研究を実施していることが比較的周知されつつあり、自らがこれまでに研究に参加したことがない場合であっても調査結果に接した経験やその実施に対して比較的親和性が高いこともその一因であったとも言えるだろう。

小・中・高校における同性愛、性同一性障害に関する情報

これまでの学校生活（小・中・高校）で、同性愛に

ついてどのような情報を獲得してきているのか尋ねた。

回答者全体では「一切習っていない」が 68.0%であったが、年齢階級別に比較すれば若年層ほど低下傾向にあり（10代 48.2%、20代 59.2%、30代 71.6%、40代 79.1%、50歳以上 80.2%）、「肯定的な情報を得た」は全体 7.5%であったが、若年層ほど増加傾向にあった（10代 23.0%、20代 12.1%、30代 4.9%、40代 1.6%、50歳以上 0.8%）。

その一方、「異常なものとして習った」「否定的な情報を得た」といったネガティブな内容を合算すると全体で 22.6%（10代 25.9%、20代 26.0%、30代 21.8%、40代 18.3%、50歳以上 17.9%）であったが、10～20代の若年層ほどネガティブな内容を学校で習ったと回答している（図1）。

情報を受け取る側の感受性などを考慮する必要はあるが、「一切習っていない」割合は減り「肯定的な情報」が以前に比して増加傾向にある一方で、「異常なもの」「否定的」といったネガティブな情報も合わせて伝えられてしまっている状況があることが示唆された。

学校教育における「性同一性障害」についても尋ねているが同様の回答傾向であった（図2）。

小・中・高校におけるいじめ被害経験

いじめ被害経験率は全体で 58.2%（10代 49.4%、20代 55.8%、30代 60.9%、40代 63.1%、50歳以上 49.8%）、セクシュアリティ別にみた現在の 10代の被害経験率は、レズビアン 34.8%、ゲイ 49.1%、バイセクシュアル男性 45.8%、バイセクシュアル女性 42.1%、MTF 85.7%、FTM 58.3%、MTX 55.3%、FTX 44.0%、その他 52.5%であった（図3）。

いじめ被害経験がある者の 63.8%は「ホモ・おかま・おとこおんな」などの言葉によるいじめ被害があり、18.3%は服を脱がされるいじめに遭っていた（図4）。トランスジェンダーや X ジェンダー、ゲイ・バイセクシュアル男性にこれらの被害率が高いことが如実に示されており、伝統的な男らしさ、女らしさから少しでも異なると、いじめの標的になっていることがわかる。

いじめ解決にあたって学校の担う役割は重大であるが、いじめ被害経験者のうち「いじめの解決のために先生が役に立ってくれた」と認識している者は全体で

図1 学校教育における同性愛について

若年層ほど「一切習っていない」割合は低い一方「異常」「否定的な情報」の割合が高率

これまでの学校生活（小・中・高）で、同性愛についてどのような情報を得ましたか？

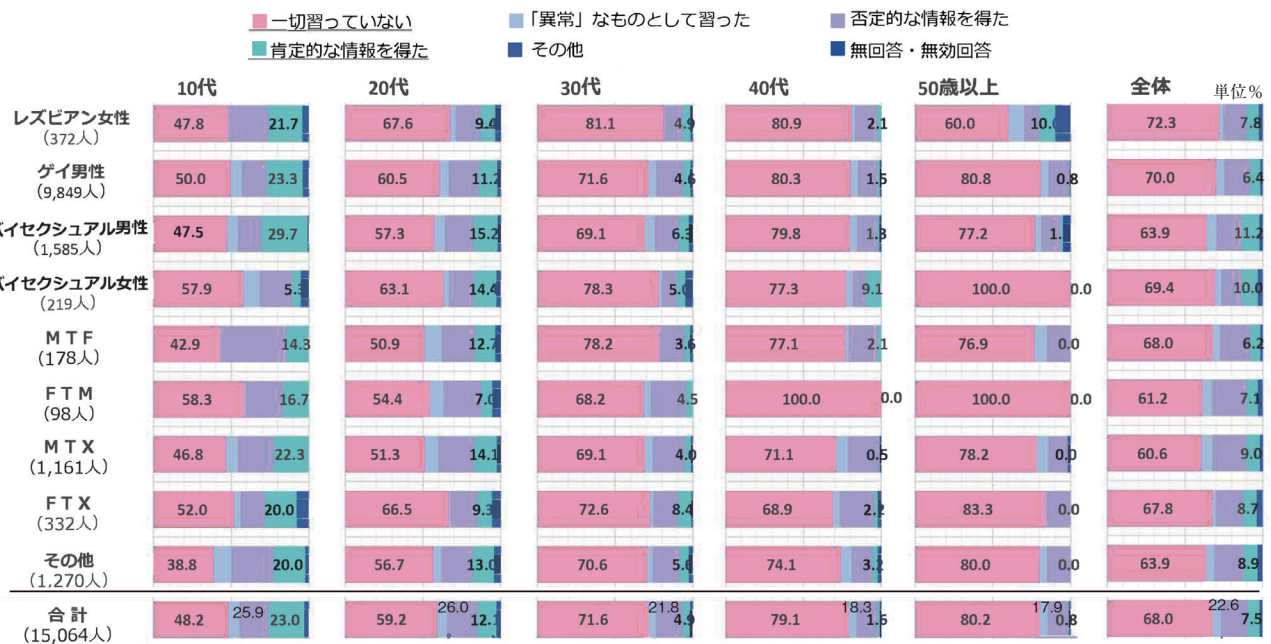
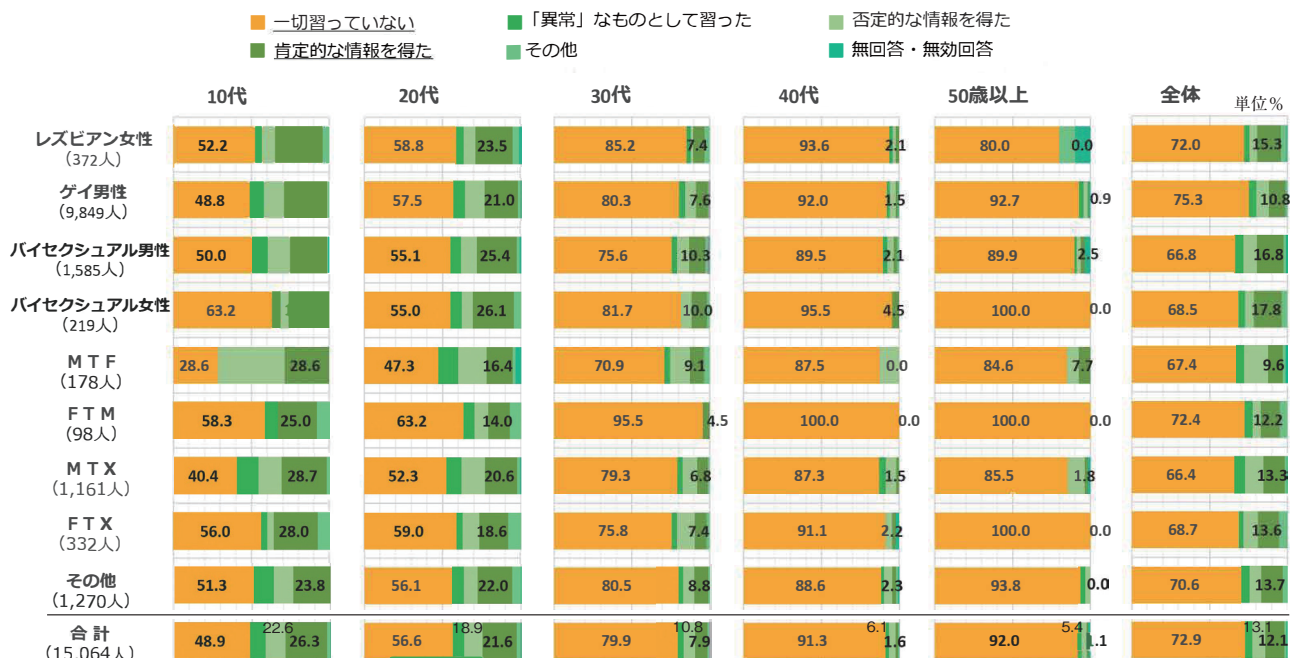


図2 学校教育における性同一性障害について

若年層ほど「一切習っていない」割合は低い一方「異常」「否定的な情報」の割合が高率

これまでの学校生活（小・中・高）で、性同一性障害についてどのような情報を得ましたか？



わずか13.6%足らずであった。いじめの発生防止と解決に向けた積極的な取組がされるようになってきた昨今の状況を反映してか、10代のいじめ被害経験者の約5人に1人が、いじめ解決にあたって教員の寄与があったと認識しており最近の状況は改善しつつあると

言えるが、それでもこの低率である。

学校現場にとっては厳しい調査結果となったが、その責任を突きつけられているとも言える。だからこそ、学校でLGBTsに取り組むことが急を要する課題であると断言できる（図5）。

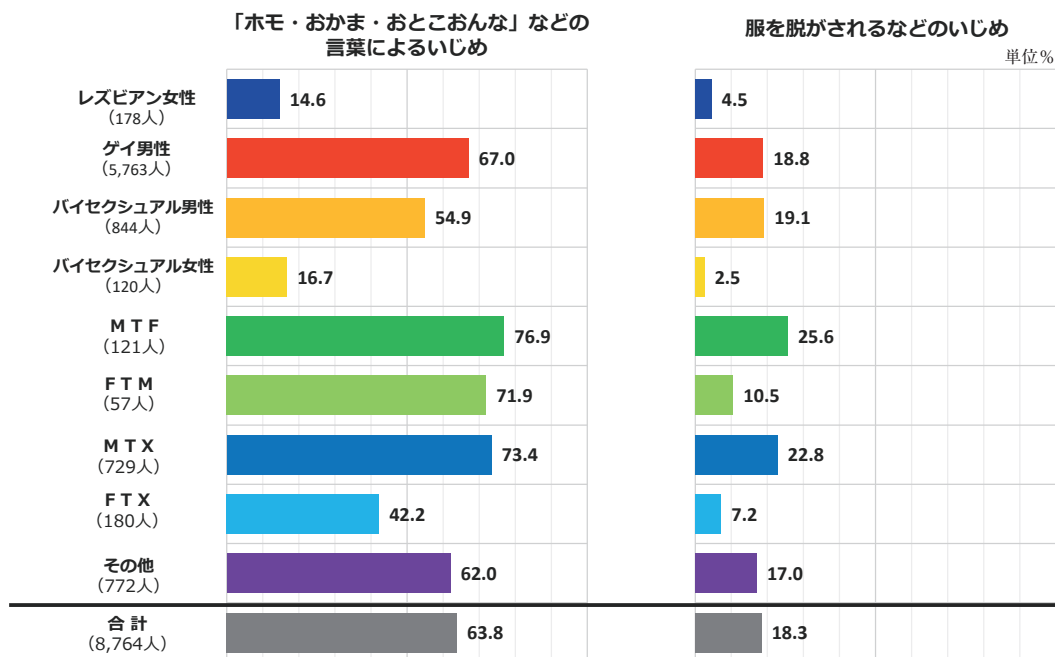
図3 学校生活（小・中・高）におけるいじめ被害経験

MTF、ゲイ、Xジェンダーに高率
男らしさ規範等が影響しているのでは

これまでの学校生活（小・中・高）で、いじめられたことがありますか？



図4 いじめ被害の内訳

ゲイ男性、バイセクシュアル男性、MTF、FTM、MTXに被害が高率
セクシュアリティに関連する言葉によるいじめ（verbal abuse）や性的ないじめ被害が高率

不登校

不登校経験率は全体で 21.1%（10代 31.9%、20代 23.5%、30代 20.9%、40代 17.4%、50歳以上 12.0%）、セクシュアリティ別の 10 代の不登校経験率は、レズビアン 30.4%、ゲイ 28.8%、バイセクシュアル男性

24.6%、バイセクシュアル女性 31.6%、MTF 57.1%、FTM 58.3%、MTX 35.1%、FTX 68.0%、その他 35.0%であった（図 6）。

不登校経験率は年齢階級と明らかに有意であり若年層ほどその傾向が顕著であること、セクシュアリティ別の 10 代においてはトランスジェンダーや X ジェンダーにその経験がさらに集中していた。

図5 先生はいじめ解決に役にたったくれたか

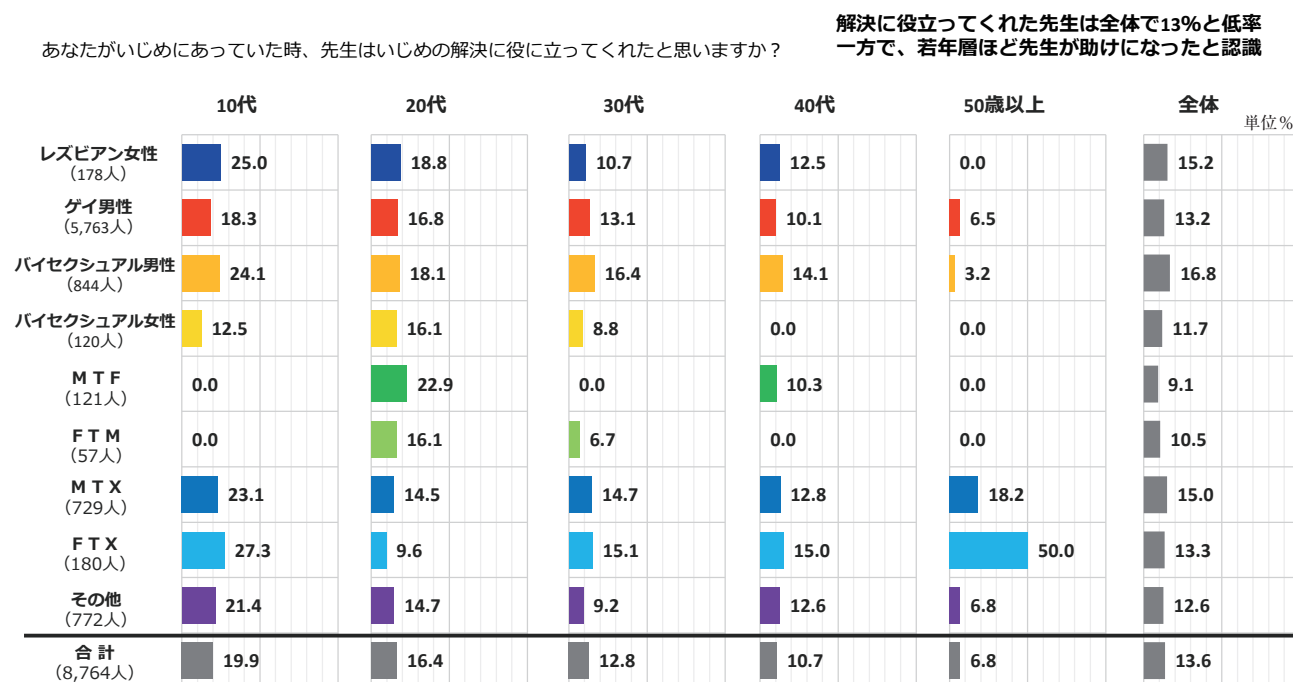
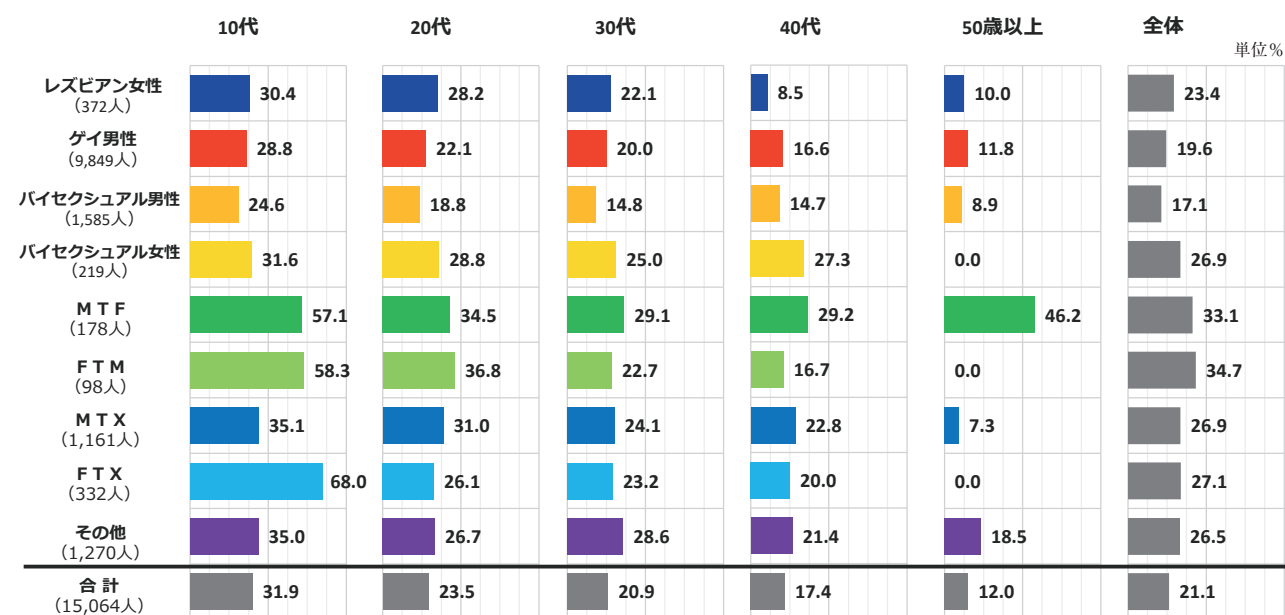


図6 不登校経験

これまでの学校生活（小・中・高）で、不登校になったことがありますか？

トランスジェンダーが最も高率、いずれにおいても若年層ほど高率の傾向に



学校から多く聞かれることのひとつに「理由の分からない不登校」があるが、もしかしたら性的指向や性自認が関係しているのかもしれないという想像力や、感度の高いアンテナを立てて、注意深く児童生徒に関わることが求められる。また、児童生徒間あるいは教員から児童生徒へのからかいやいじりの言葉として、「レズ」「おネエ」といった言葉掛けがされること

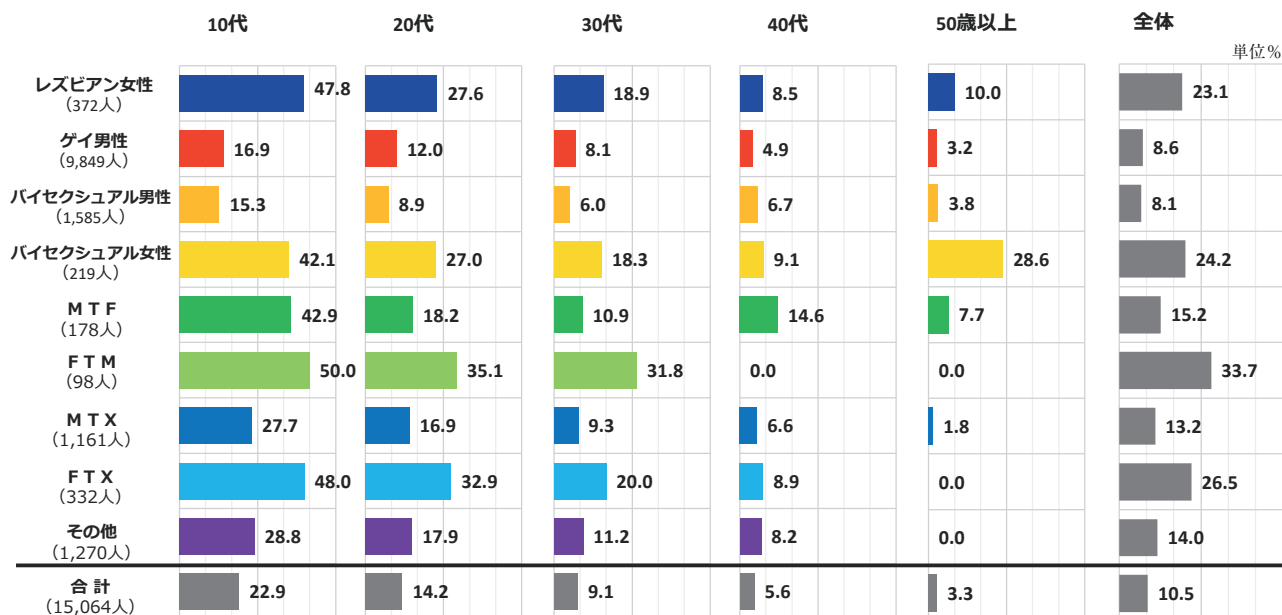
があるが、それが原因で不登校やいじめにつながった事例も数多くある。

あるいは、保健の授業時のエイズ予防教育の際、男女での感染の流行だけではなく男性同性間においても同様に国内でも流行があるためいずれにおいてもコンドームの使用による予防は重要だと説いた後に、男性同士の恋愛は気持ち悪いと教員が言い放った言葉とそ

図7 自傷行為経験

FTM、バイセクシュアル女性、FTX、レズビアンが高率
いずれにおいても若年層に集中

これまでに、次に挙げる症状や行動を経験したことがありますか？「刃物でわざと自分の身体を切るなどして傷つけた」



首都圏の男子中高生を対象にした調査では7.5%と示され、比較すれば当該集団の10代では約3倍（7.5% vs. 22.9%）の経験率

れに爆笑した教室の反応を見て深く傷つき、徐々に不登校になったという当事者からの証言も調査実施中に届いている。教員は、教室に1～2人はLGBTsの当事者がいるかもしれないというリアリティと認識を強く持たなければならない。

自傷行為

刃物でわざと自分を傷つけたといった自傷行為経験率は全体で10.5%（10代22.9%、20代14.2%、30代9.1%、40代5.6%、50歳以上3.3%）、セクシュアリティ別の10代の自傷行為経験率は、レズビアン47.8%、ゲイ16.9%、バイセクシュアル男性15.3%、バイセクシュアル女性42.1%、MTF42.9%、FTM50.0%、MTX27.7%、FTX48.0%、その他28.8%であった（図7）。

首都圏男子中高生における刃物による自傷行為経験率は7.5%^{注3}と報告されており、それと比較しても10代のゲイ・バイセクシュアル男性の自傷行為経験率は2倍以上であり、これは2014年に実施したゲイ・バイセクシュアル男性を対象にした調査で示された結果を、ほぼ再現したものであった。しかしながらこの度の調査で示されたレズビアンやトランスジェンダー・Xジェンダーのその経験率は、まるでゲイ・バイセクシュアル男性のそれが低率に見えるほどに高率であった。

おわりに

本調査で示されたLGBTsが学齢期に直面するいじめ被害・不登校・自傷行為経験率を示す数値は、筆者が1999年以降ゲイ・バイセクシュアル男性を対象に定期的に実施している横断調査とはほぼ同様の再現性のある結果であると同時に、一部のライフイベントはゲイ・バイセクシュアル男性よりもレズビアン・トランスジェンダーの被害経験率が高率であることが明らかになった。

研究実施の告知をバナー広告やSNS等を通じて知り、自発的に参加するインターネット調査という研究手法上の限界があることを認識しつつも、この手法によって明確化あるいは度々再現される調査結果があり、研究知見が積み重ねられてきている。学校現場はLGBTsが直面している過酷なこの現状を真摯に受け止め、児童生徒の命と人生を守るといった基本的な姿勢に立ち返り、学校での取組を全力で実施する時期にきているであろう。

筆者が2011～2013年に6自治体5,979人の教員を対象に実施した調査（<http://www.health-issue.jp/f/>）によれば、教員養成課程において同性愛について学んだ者は7.5%、性同一性障害については8.1%と低率で

あった。回答者の30.8%が「同性愛は精神的な病気のひとつである」と認識しているあるいはそれについてはわからないと答え、71.4%は「同性愛になるか異性愛になるか、本人の選択によるものである」と認識あるいはわからないと回答している。

LGBTsについての最も基本的な知識すら浸透しておらず、さらには誤解があることが明らかになっているが、教員のみならず医師・助産師・保健師・看護師や臨床心理士をはじめとするスクールカウンセラーのいずれの養成課程においても、わが国では性的指向や性自認を学ぶカリキュラムやその研修機会はほとんど確保されていない。

2015年4月30日に文部科学省は「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」と題する通知を全国の教育委員会に発出した。この通知では教職員は「悩みや不安を抱える児童生徒のよき理解者となるように努めることは当然」であり、悩みや不安を受け止める必要性は、「性同一性障害だけではなく性的マイノリティとされる児童生徒全般に共通する」と記され、「学級・ホームルームにおいては、いかなる理由でもいじめや差別を許さない適切な生徒指導・人権教育等を推進することが悩みや不安を抱える児童生徒に対する支援の土台になる」とも書かれている。この通知以降、教員研修のテーマとしてLGBTsが加えられるようになってきたが、一部の教員の受講に留まる場合も多く、今後はその機会を積極的に確保していくことが急務である。

調査結果から示されるLGBTsの学校での過酷なライフイベントの発生を防止あるいは少しでもその数を軽減させるために学校現場が今すぐ出来ることは数多くある。教員が親身になって彼らの抱える性的指向や

性自認に関する戸惑いや葛藤に耳を傾け丁寧な個別対応をすること、自己肯定感や自尊感情が損なわれることがないようにセクシュアリティの多様性について肯定的にポジティブな情報を伝えていく授業の実施、関連する図書の配架や啓発のポスターの掲示、保護者や地域を巻き込んで理解を進める場を設けること等々であろう。事実、人権教育・人権学習の一環としてLGBTsを含むセクシュアリティの多様性について学ぶための授業案を教育委員会が作成、それらをもとにした授業実践の試みが各地に広がっている。

筆者が奈良県人権教育研究会と共に授業案とパワーポイントを制作・指導上の留意点をまとめ^{注4}、担任による授業を高校で実施した。加えて授業実施前後にその教育効果の測定のために2,146人の高校生を対象に自記式質問紙調査を実施したところ、1回の講義でLGBTsについてネガティブな印象を抱いていたおよそ半数にその考えの変容が認められている。学校現場の本気の取組は必ずや多くの子どもたちに届くことが期待され、一歩踏み出すための勇気と覚悟が今、学校に求められている。

注1 LGBTsの「s」とは、LGBTに含まれない性的マイノリティを意味する記号。Lは、レズビアン（女性同性愛者）Gは、ゲイ（男性同性愛者）、Bは、バイセクシュアル（両性愛者）、Tはトランスジェンダー（生まれたときの法的・社会的性別とは異なる性別で生きる人、生きたいと望む人）の略。

注2 FTM（戸籍の性は女性で、性自認は男性）、MTF（戸籍の性は男性で、性自認は女性）。Xは、男女のどちらかではなく、両方であったり、そのどちらでもなかったり、流動的であったり、また性別という概念自体ないという場合を意味する。

注3 Matsumoto T, Imamura F (2008) Self-injury in Japanese junior and senior high-school students: Prevalence and association with substance use. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 62: 123-125

注4 授業案の入手を希望される方は、下記のメール宛てに「授業案希望」と明記の上、お問い合わせください。

hidaka-office@takara-univ.ac.jp

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です (tel 03-6801-9307)。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

■調査報告

第8回「青少年の性行動全国調査」 (2017年)の概要

東北学院大学教養学部教授 片瀬一男

武蔵大学社会学部准教授 林 雄亮

「青少年の性行動全国調査」の概要

本報告書は、今回で第8回を迎える「青少年の性行動全国調査」の主要な結果を過去の調査結果と比較する形で示したものである。この調査は、表1に示したように、1974年からほぼ6年おきに全国の中学・高校・大学生を対象に行われてきた（ただし、中学生を調査対象に加え、調査地点を町村にまで拡張したのは、1987年の第3回調査からである）。6年おきに調査が実施されてきたのは、6年たつと中学・高校生の母集団が入れ替わるので、この間隔で調査を行うことで、日本の青少年の性行動を切れ目なく把握できるためである。

この調査が始まった1970年代は、青少年の性の問

題が今からみれば過剰なほどに「問題化」された時期であった。たとえば、『昭和56年版青少年白書』（総理府青少年対策本部）の「序説」は、60年代末の大学紛争の嵐が去った後、今度は若者に「ヒッピー」や「フリーセックス」といった風潮が広がり始めていることに危惧を表明している。またマスコミも、『毎日新聞』が1970年の紙面で「青年＝若ものたちの性」というテーマで「一夫一婦はナンセンスか」「フリーセックスは可能か」といった5回にわたる特集記事を連載する一方、「青少年：わが家の性教育」と題して16名の識者に子どもに対する性教育の実例を語ってもらっている。

青少年の性の問題は、国会でも取り上げられた。1971年の参議院本会議では、松下正壽議員が「ヒッピー、ゲバ棒、ハイジャッキング、性生活の混乱」な

表1 「青少年の性行動全国調査」の調査地点と調査対象者数

調査（調査年）	調査地点数			調査対象者数					
	大都市	中都市	町村	中学生	高校生	専門学校生	短大生	大学生	合計
第1回（1974年）	3	7	—	—	3690	—	158	1152	5000
第2回（1981年）	3	4	—	—	2970	—	500	1519	4989
第3回（1987年）	3	3	3	3599	3270	—	489	1323	8681
第4回（1993年）	3	3	3	2016	2016	—	251	661	4944
第5回（1999年）	4	4	4	2187	2176	—	132	997	5492
第6回（2005年）	4	4	4	2187	2179	66	—	1078	5510
第7回（2011年）	4	4	3	2504	2578	—	—	2558	7640
第8回（2017年）	6	33	4	4449	4282	—	—	4194	12925

注1) 第7回調査は、ウエイト付け後の対象者数である。

注2) 第8回調査は、性別には無回答のほかに、今回新たに設けた「その他」に回答した者もいた。これらの人数は少数なので、標本構成を示した表1では集計に入れたが、実際にデータの統計分析をした「主要な結果」(p10～)の図表からは省いてある。

どを「現代の病根の徴候」ではないかと糺し、高見三郎文部大臣は「青年の逃避的傾向、暴力的傾向」となっていて「性の乱れ」が現代青年の問題と答弁している。また、同年の参議院予算委員会では萩原幽香子議員が若者の「性の乱れ」を文部大臣に、性病予防対策費の減額について厚生大臣に、職場での性教育について労働大臣に質問している。

これらの議論の背景には、若者の性行動（婚前性交）＝「逸脱」という図式が潜在していたとみることでもできる。実際、NHK放送文化研究所が1973年に行った「日本人の意識」調査でも、婚前性交を「愛しあっていればかまわない」とする回答は19%にとどまり、「結婚式がすむまですべきではない」という回答が58%あった。

こうしたなかで1971年に総理府青少年対策本部（当時）は、日本性教育協会に委託して、全国の15歳～24歳の男女5000人を対象に「青少年の性に関する意識調査」を実施した。この調査の結果は、『昭和56年版青少年白書』に収録されているが、いわゆる「フリーセックス」（「性交は自由に行われてよい」）を肯定する者は男子49%、女子19%程度だが、その理由を尋ねると「お互いの愛情の結びつきだから」が6割を占めていたことから、「フリーセックス」の内実は「乱交」ではなく「婚前性交」を意味したことがわかる。

『白書』はまた性に関する規範意識も分析したうえで、「ある程度青少年の性に対するモラルを示している」と総括している。ところが、この『白書』に関する報道を見ると「進むヤング・セックス」（『毎日新聞』1975年11月23日）、「早熟傾向歴然」（『朝日新聞』同日）と、1時点の調査であるにもかかわらず、青少年の性行動が早期化・活発化しているような印象を与える見出しが並んだ。ただ『朝日新聞』は「新性時代へ対応探る」という見出しで朝山新一調査委員長の談話を載せ、続報として11月29日に「将来はさらに自由化しそう／規制より共に考える姿勢を」という医事評論家の村松博雄の論説を掲載している。

この総理府の調査は画期的なものではあったが、「青少年の性に関する意識調査」という名称からわかるように意識を中心とした調査であった。そのため、青少年の性行動も含め、その変化も時系列的に追跡できる調査として企画されたのが「青少年の性行動全国調

査」であり、その第1回調査は総理府調査をリードした朝山新一を委員長として1974年に行われた。

本報告書には、この第1回調査から第8回調査までの青少年の性行動の経験率が示されているが、少なくとも1970年代から80年代にかけては、大学生の経験率の上昇は顕著だが、高校生については、いずれの行動の経験率もほぼ横ばいであり、70年代のマスコミが喧伝した「性の早熟化」といった状況とは程遠いことがわかる。そして、高校生の性行動が活発化の兆しを見せるのは1990年代に入ってからである。

このようにメディアが伝える若者像と現実の若者の実像の間に乖離がみられることは、少年非行（広田2001、土井2003）や労働（本田ほか2006）の領域でも指摘されてきた。言わばメディアは、都合のよい「メディア・フレーム」によって若者の多様な現象の一部を切り取り、単純化してその時代の若者像を「構築」しているにすぎない。

ここでいう「メディア・フレーム」とは、メディアが報道する事実の選択をする際の枠組みであるが、アメリカでは1960年代の若者の異議申し立てがメディアのフレームによって恣意的に歪められて伝えられたことが、当時の運動当事者による長年にわたる研究によって明らかにされている（Gitlin 1993 = 1993）。日本でも、とりわけ1970年代は、若者に社会の関心が集まり、「モラトリアム人間」（小此木1978）論をはじめとする若者言説が氾濫し始めた時代でもあった（片瀬2015）。

今日、若者の性教育に限らず、教育政策にはこうした安易な若者言説ではなく、確かなエビデンス（科学的根拠）が求められている（荻谷2001、中澤2018）。40年にわたって継続的に実施され、知見を蓄積してきた本研究が、今後の性教育の礎となるエビデンスを提供できることができれば、何よりの幸いである。

主要な結果

主要な性経験として（デート経験・キス経験・性交経験）をとりあげ、この43年の間に（ただし、中学生の調査は1987年以降である）学校別・性別にどのような変化が起こったかを示す。

最後に2017年調査における特徴的な傾向や今後の課題について述べる。

デート経験

図1にはデート経験率の推移を学校段階、性別に示した。大学生については、1974年の時点から男女ともに7割を超える者がデートを経験しており、男女ともに1990年代にかけて経験率の緩やかな上昇がみられ、1993年調査では男女ともに8割を超える経験率となった。

しかし2000年代に入ると経験率は男女ともに低下

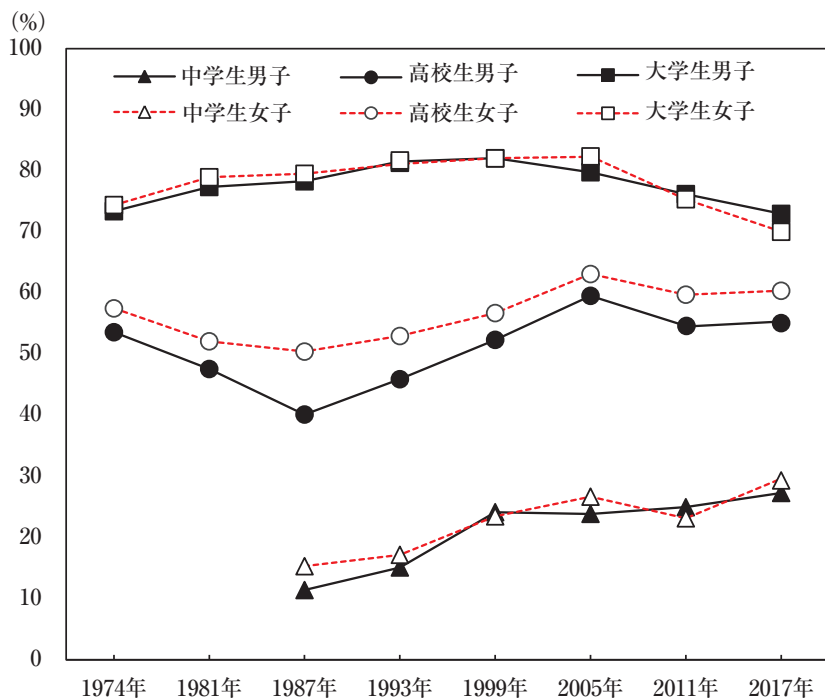


図1 デート経験率の推移

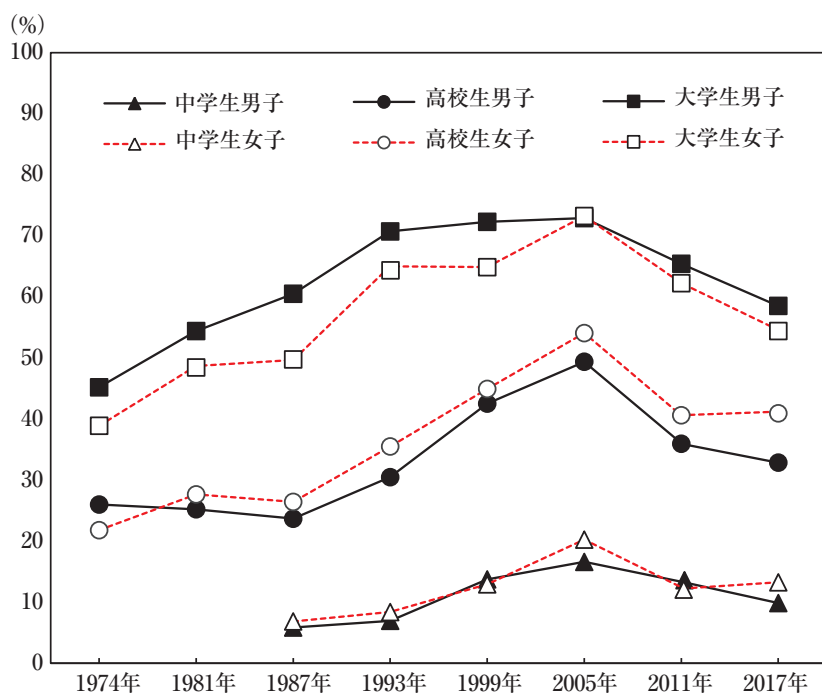


図2 キス経験率の推移

しはじめ、2005年から2011年にかけては男子で約3ポイント、女子で約5ポイント低下し、さらに2011年から2017年にかけては男子で約5ポイント、女子で約8ポイント低下しており、今回の2017年調査では過去最低水準の経験率となった。また2005年以降、男女の経験率が逆転し、2017年調査では男子の経験率が女子の経験率を約3ポイント上回っている。

高校生は、大学生よりもデート経験率の性差が大きいことが特徴であり、すべての時点において女子のデ

ート経験率の方が男子の経験率よりも高い。推移に着目すると、男女いずれにおいても1980年代は経験率が低下していく傾向がみられていたのに対し、かわって1990年代は経験率が上昇していく傾向、そして2000年代に入って再度経験率が低下していく傾向がみられている。

最も経験率が高かったのは男女ともに2005年時点であるが、今回の2017年調査ではそこから男子は約5ポイント、女子は約3ポイント低下している。また1987年調査から2005年調査にかけて経験率の男女差は縮小してきたが、それ以降は少なくとも男女差の大きな変化はみられない。

中学生のデート経験率は1987年以降大きなトレンドで言えば上昇傾向が続いており、2017年調査では男女ともに過去最高水準となっている。女子の経験率は、2005年から2011年にかけていったん低下したものの、2017年にかけては約7ポイント上昇し、男子の経験率を再び上回っている。

キス経験

図2にはキス経験率の推移を学校段階、性別に示した。大学生については、1974年から1993年にかけて男女ともに経験率の大幅な上昇がみられた。

1974年時点では男女ともに5割を下回っていたが、1993年時点では男子で約7割、女子で約3分の2がキスを経験しているようになった。またこの

間、常に男子の経験率が女子の経験率を上回っていたが、2005年時点では男女ともにほぼ同じ水準となった。男女いずれにおいても2005年のキスの経験率をピークとして、2011年にかけては男子で約8ポイント、女子で約11ポイントの大幅な低下がみられた。

2017年調査でもこの低下傾向は続いており、2011年からさらに男子で約7ポイント、女子で約8ポイントの低下が起こっている。これは1987年調査の水準にはほぼ相当しており、特に女子の経験率の低下が著しい。

高校生のキス経験率は、男女ともに1974年から87年までは25%程度で横ばい状態だったが、87年から2005年にかけて急激に上昇し、大学生と同様に2005年をピークとしてそれ以降は低下に転じている。

2005年には男子ではほぼ半数、女子では過半数がキスの経験があったのに対し、それから2011年にかけては男子で約12ポイント、女子で約12ポイントの低下がみられ、今回の2017年調査では2011年から男子で約4ポイントの経験率の低下が起こっている(女子は横ばい)。また性差に着目すると、大学生とは異なり、1981年以降のすべての時点で女子の経験率が男子の経験率を上回っている。

中学生のキス経験率は1987年の調査開始時には男子で約6%、女子で約7%だったが、2005年時点までに男女ともに経験率は約3倍となった。また1999年まではキス経験率の性差はごく小さかったが、2005

年には女子の経験率が男子を約4ポイント上回るようになった。それ以降は大学生、高校生と同様に、中学生においても2005年から2017年にかけて男子は約6ポイント、女子は約7ポイント低下している。

性交経験

図3には性交経験率の推移を学校段階、性別に示した。大学生については、1974年時点において男子で約23%、女子で約11%であった性交経験率が1980年代、1990年代を通して上昇し続けてきた。経験率のピークは男女とも2005年で、男子は約63%、女子は約62%である。またこの間に、男子の方が常に経験率が高いという性差が縮小しており、2005年には差はほぼなくなっている。

その後は2011年にかけて男子で約9ポイント、女子で約16ポイントも経験率が低下し、2017年にかけてはさらに男子で約7ポイント、女子で約9ポイント低下している。

高校生の経験率については、男女とも1970年代から80年代初頭まではほぼ横ばいであったが、男子は1981年から2005年にかけて、女子は1987年から2005年にかけて大きく上昇してきた。またそれ以降は大学生と同様に経験率の低下がみられるが、性差のあり方は異なり、2005年以降高校生において

は女子の経験率の方が男子よりも高い状態が続いている。2017年時点では男女ともに2割を下回っており、1990年代とほぼ同じ水準まで低下した。

中学生の性交経験率は1987年の調査開始以来、常に5%を下回っている。ただし絶対的な水準は低いままであるが、今回の2017年調査における経験率は男子で約4%、女子で約5%となっており、長期的には上昇傾向にある。

今後の課題

前回の2011年調査では、主要な性行動の経験率がそれまでのトレンドとは異なり全体的に大きく低下し、この性行動の不活発化の傾向が大きく世間の注目を集めた。

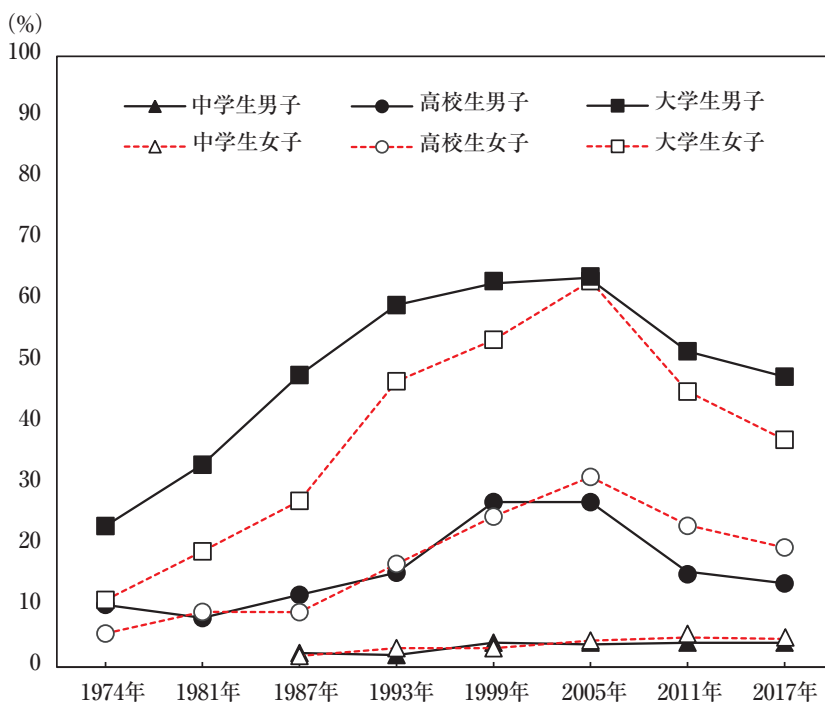


図3 性交経験率の推移

付表 主要な性行動経験率

(%)

経験の種類	調査年度	1974年	1981年	1987年	1993年	1999年	2005年	2011年	2017年
デート	大学男子	73.4	77.2	77.7	81.1	81.9	80.2	77.1	71.8
	大学女子	74.4	78.4	78.8	81.4	81.9	82.4	77.0	69.3
	高校男子	53.6	47.1	39.7	43.5	50.4	58.8	53.1	54.2
	高校女子	57.5	51.5	49.7	50.3	55.4	62.2	57.7	59.1
	中学男子	—	—	11.1	14.4	23.1	23.5	24.7	27.0
	中学女子	—	—	15.0	16.3	22.3	25.6	21.8	29.2
キス	大学男子	45.2	53.2	59.4	68.4	72.1	73.7	65.6	59.1
	大学女子	38.9	48.6	49.7	63.1	63.2	73.5	62.2	54.3
	高校男子	26.0	24.5	23.1	28.3	41.4	48.4	36.0	31.9
	高校女子	21.8	26.3	25.5	32.3	42.9	52.2	40.0	40.7
	中学男子	—	—	5.6	6.4	13.2	15.7	13.9	9.5
	中学女子	—	—	6.6	7.6	12.2	19.2	12.4	12.6
性交	大学男子	23.1	32.6	46.5	57.3	62.5	63.0	53.7	47.0
	大学女子	11.0	18.5	26.1	43.4	50.5	62.2	46.0	36.7
	高校男子	10.2	7.9	11.5	14.4	26.5	26.6	14.6	13.6
	高校女子	5.5	8.8	8.7	15.7	23.7	30.3	22.5	19.3
	中学男子	—	—	2.2	1.9	3.9	3.6	3.7	3.7
	中学女子	—	—	1.8	3.0	3.0	4.2	4.7	4.5

その詳細な分析結果は日本性教育協会編（2013）や林雄亮編（2018）に収められているが、今回の2017年調査において最も注目されるべきポイントは、その傾向がさらに続いているのか、それとも一過性の現象であったのかということだろう。

以上の結果から明らかなように、今回の2017年調査では青少年の性行動の不活発化がさらに進行し、特に女子でその傾向が著しいことが明らかとなった。そして、これによって性行動における性差も拡大していることはきわめて重要な知見である。

性の心理的側面についても同様の変化が起きている。すなわち、性的関心をもった経験がある割合が、男子ではおおむね前回調査の値より上昇しているのに対し、女子では逆に低下しているのである。性に対するイメージの悪化も女子において顕著であることから、性の行動的側面のみならず、心理的側面においても消極化が女子においてさらに進行していると言える。

今回の調査で確認されたこのような変化は、どのような社会的背景と結びついているのだろうか。2017年調査では中学生、高校生、大学生にそれぞれ独自の調査票を用意し、それぞれが置かれている家庭環境や社会環境を可能な限り適切に把握することに努めた。

これらの情報をもとに、今回みられた新たな現象に関する詳細な考察をおこなっていくことが今後の課題である。

【参考文献】

- 土井隆義、2003、『〈非行少年〉の消滅——個性神話と少年犯罪』信山社。
- Gitlin, Todd, 1993, *The Sixties: Years of Hope Days of Rage*, Bantam Books (=1993, 疋田三良・向井俊二訳『60年代アメリカ：希望と怒りの日々』彩流社)。
- 林雄亮編、2018、『青少年の性はどう変わってきたか——全国調査にみる40年間』ミネルヴァ書房。
- 広田照幸、2001、『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会。
- 本田由紀・内容朝雄・後藤和智、2006、『ニートって言うな！』光文社。
- 荻谷剛彦、2002、『教育改革の幻想』筑摩書房。
- 片瀬一男、2015、『若者の戦後史——軍国少年からロスジェネまで』ミネルヴァ書房。
- 中澤渉、2018、『日本の公教育—学力・コスト・民主主義』中央公論新社。
- 日本性教育協会編、2013、『「若者の性」白書——第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館。
- 小此木啓吾、1978、『モラトリアム人間の時代』中央公論社。

★本調査（第8回）の報告書は、本紙21ページの案内より購入できます。また、データに関して無断で使用、掲載、印刷することを禁じます。使用に関しては、日本性教育協会にお問い合わせください。TEL03-6804-9307

★本調査（第8回）を分析したセミナーが11月23日（金・祝日）に開催されます。詳しくは、本紙20ページをご覧ください。

思いこみの めがね

シゲせんせーのポジティブライフ

鈴木茂義 Suzuki Shigeyoshi



公立小学校非常勤講師。14年間の公立小学校正規教諭、主任教諭を経験。専門は特別支援教育、教育相談、教育カウンセリングなど。

「シゲせんせー、彼女いないの?」「結婚しないの?」小学校で働いていると、このような突発的な質問が子どもたちから飛んできます。子どもたちとのやり取りを想定したマニュアルを心の中に準備して、とっさの判断で質問に答えます。「彼女? いるよー」(彼氏を彼女に置き換えているけどね)「結婚? いつかできるといいなあ」(同性婚が実現したら、私にも結婚の選択肢が増えるかもしれないね)。

「シゲせんせー、学校の先生は結婚して子どもを育ててこそ一人前の先生よ」これはある保護者に言われた言葉です。私は「そうですねえ、へへへ」と愛想笑いでその場をやり過ごしました。

彼女や結婚のことを聞かれるたびに、以前の私は自分のセクシュアリティをどう伝えるか迷っていました。うまく答えられないので(面倒なので)ちょっとした嘘とごまかしと愛想笑いで、そのような場面を切り抜けていました。と同時に「何で嘘をつかなくてはいけなのかな」「正直に話したいのになあ」という気持ちが大きくなってきました。

ある年、高学年の学級担任になりました。今までの自分の経験以上に、パワフルで個性的な子どもたちでした。やんちゃなところもありましたが、エネルギー感も面も見えました。地域の陸上記録会に出かけるときに私が自分の紺色のトートバックを教室にもっていったのですが、そのクラスの子に突然「オカミみたいなバックを持ってるね」と言われたことがありました。ある日の社会の授業中には、ある子が急に「シゲせんせーはゲイだと思う!」と大声をあげたこともありました。このような事態にどう対応するか、私は常に瞬発力を試されていた気がしました。

そんなクラスの子どもたちを「学級経営」の名の下に、指導をしました。「素直であれ!」「正直であれ!」「正しく生きろ!」と、必死に伝えていました。なかなか辛い日々でした。しかし私も辛かったですが、子どもたちはその何倍も辛かった気がします。ただの口やかましい担任

の先生でした。

慌ただしい日常は、しばらく続きました。そのような日常の中で、ある日ふと気がついたのです。「子どもたちに素直であれ、正直であれと言っている割には、自分はセクシュアリティのことを子どもに伝えていないなあ」「子どもに嘘をついているなあ」「自分の言っていることとやっていることが、矛盾しているなあ」と感じました。そのことに気づいた日から、考える日々が続きました。「カミングアウトしようかしまいか」「いや、学級担任の立場でカミングアウトなんてできない」「いや、自己矛盾を抱えたままでこの子どもたちと対峙できるのか」と、頭も心もぐるぐるしていました。

迷いの中で私は「子どもたちの卒業後にゲイであることをカミングアウトする」「小学校の教員を退職する」ということを決めました。それは同時に「子どもにも自分にも嘘をつくことをやめる」という覚悟を決めた瞬間でもありました。

私自身の在り方が変わったのがきっかけかどうかわかりませんが、クラスの子どもたちに変

化が表れました。学校行事のお祭りでクラスの出し物を企画したのですが、子どもたちがいつも以上に積極的に活動をしていました。出し物のアイデアをたくさん出し、準備もスムーズ。お互いに協力している姿がたくさん見られました。普段は口やかましい私も、口出した気持ちをごっところえてみました。子どもたちをもっと信頼しようと思いました。企画のお化け屋敷は、大成功に終わりました。お化け屋敷に参加してくれた1年生から絶大な評価をもらい、子どもたちも満足そうでした。後片付けで窓に貼った段ボールをはがしながら、私はこのクラスの何かが変わったような気がしました。

嘘とは何だろう? 矛盾とは何だろう? と考えます。同じように、素直さとか正直さは万能選手なのだろうか? とも考えます。

嘘をついてしまう子どもとか私とか、素直になれない保護者とか私とか、矛盾を抱えるように見える同僚とか私とか。そんないろいろな一面がある人や自分というものを、まるごと受け止めるのもいいなあと思います。今はそんなことを考えています。

第5回

「先生は嘘をつく。 先生は矛盾している」 素直であれ、誠実であれ

[福岡県遠賀郡岡垣町立岡垣東中学校] (上)

養護教諭が中心となって 全職員で取り組む「性」=「いのち」の教育

福岡県の北部、福岡市と北九州市の間に位置する岡垣町は、豊かな水源と海、山に囲まれた自然豊かな町だ。バドミントンが盛んで、オリンピック選手を始めバドミントンで活躍する選手が数多く育っている。今回訪ねたのはバドミントンの強豪校としても知られている岡垣町立岡垣東中学校。教職員全体で性教育に取り組んでいると聞き、お話を伺った。

教職員全体で性教育に取り組むメリット

学校における性教育の取り組みは、養護教諭が一人で試行錯誤しながら進めていくケースが多いと聞くが、岡垣東中学校では教職員が一体となって性教育に取り組み成果を上げている。その中心となるのが、白石芳美養護教諭。

性教育には今から22年前、小学校に勤務していたころから取り組んでいたという。

小学校の性教育では、1年生から6年生までの指導案をつくり、ひとりで授業を実践していた。まさに孤軍奮闘していたが、その後、福岡県教育委員会の研究指定・委託を受けて、小学校全職員で性教育に取り組むことになった。この経験が、現在の中学校での取り組みの素地になっているという。

「性教育は、養護教諭が行うと、その専門性からどうしても『生徒に教える』という形になりがちなんです。実際、私もひとりで取り組んでいたときはそうでした」と白石養護教諭。

あれも教えたい、これも教えたいと欲張って、知識をどんどん詰め込んでしまう傾向があるのだそう。

しかし、教職員全体で性教育に取り組むと、『性をどのようにとらえて、子どもたちに伝えていくか』ということを経験しながら考えていくことが出来るようになる。

「教える授業から考えさせる授業に発展していくことを実感している」という。また、教職員同士が連携・協力をしながら指導していくT・T（ティーム・ティーチング）のよさを発揮できるのも大きなメリッ

岡垣町立岡垣東中学校 校長・中尾 真己都
生徒数 436 名
教職員数 28 名

(2018 年 7 月現在)

トだ。

「性教育においてT・T授業を行うと、養護教諭も担任も心理的負担が軽くなるんです」と白石養護教諭。たとえば、T・Tを実践する前には、こんなことがあったそう。

「生命誕生についての授業を担当にしてもらおうと、授業シナリオの原稿を書いたことがありました。しかし、内容的に不得意だと感じている先生は、授業シナリオの原稿を棒読みするばかり。性教育は先生方には大きな負担になると感じました」。そこで『知識』の部分は白石養護教諭が担当し、その後、担任が『考える』活動に結び付ける形にしたという。「生徒のことを把握している担任は、子どもによってこちらの質問にどう答えるかをよく知っていて、効果的に『考える』『話し合う』といった学びを深めてくれます」という。

授業実施までの過程

授業は、毎年、年度当初の職員会議の中で、年間の健康教育（性教育）の実施計画を立案し、提案する。具体的には以下の手順で進めていくという。

①日程調整〔保健主事（養護教諭）、教務〕

性教育の実践にあたり、日程を決めるのは各学校が苦勞することだが、岡垣東中学校では、教務が月の行事をいれていくときに、始めからこの日にしようと先

年間の健康教育（性教育・薬物乱用防止教育）学年別目標（2018 年）

1 年生

テーマ（分野）	目 標	時期・担当
思春期の体の変化 (保健体育)	・ 二次性徴期の体の変化や特徴について知るとともに、月経や射精の仕組みについて認識させ、生命を創り出す体になっていくことに気づかせる	6 月 体育教師
思春期の心 (学級活動)	・ 身体の成長だけでなく、心も大きく揺れ動くこの時期に、自分以外の人の体験・葛藤・苦悩を知ること、自分自身を客観的に振り返り、「心の変化」について見つめさせる。	7 月 担任
エイズと人権 (人権)	・ エイズについての感染経路及び予防方法を正しく理解させ、予防する力を身につけさせる。 ・ アフリカにおけるエイズ孤児の生活の実態を知らせ、差別・偏見をなくし、ともに生きて行くことの大切さを気づかせたい。	12 月 養護教諭・担任
生命誕生 (総合)	・ 生命誕生の過程を科学的に理解させることによって、人間の体の素晴らしさや生命誕生の神秘性について考え、両親や多くの人々に支えられて誕生した自他の生命を大切にするという意識を高める。	1 月 養護教諭

2 年生

項 目	目 標	時期・担当
喫煙による体の影響 (保健体育)	・ 未成年者の喫煙は生活習慣の要因となり、成長期の体に悪影響となることを理解させる。また学習を通して生涯を通じ、自らの健康を適切に管理させる能力を身につける。	6 月 体育教師
ストレスへの対処 (学活)	・ 日々のイライラや不安などのストレスが喫煙を含めた薬物に入るきっかけともなっているため、ストレスへの対処法を知ること自分をコントロールする力を養う。	7 月 担任
多様な性 (人権)	・ 身体の性・性自認・性的指向など、性のあり方は人それぞれ多様であることを理解し、LGBT についての正しい知識を学ぶことで、誰もが自分らしく生きていけるため社会を築いていこうとする態度を育てる。	12 月 担任・外部講師 副任・養護教諭

3 年生

項 目	目 標	時期・担当
10 代の性について (学級活動)	・ 性情報のあふれる現代社会の中で、10 代の若者が抱える性の問題について現状を知らせる。 ・ 性交に伴う人間関係や妊娠・中絶についても考えさせ、自分や相手を大切にすることを育てる。	7 月 〈男女別〉 養護教諭 外部講師
免疫とエイズ (保健体育)	・ HIV ウイルスは体の防御機能である免疫のしくみを破壊し、免疫力を低下させることを科学的に知らせる。 ・ 性感染症と HIV 感染症との関連を知らせ、人間の行為や行動で予防できる病気であることを理解する。	11 月 体育教師
輝いて生きる (人権)	・ HIV で死を宣告された少年 M の苦しみやもっと生きたいとする心情及び彼を支える家族の思いにふれ、生きることの大切さや命の尊さを考えさせるとともに、充実した毎日を送ろうとする心を育てる。	12 月 担任

に時間取りをして指導時間を設定する。

②実施計画提案〔企画委員会〕

学期ごとに具体的な実施計画案をつくり、校長、教頭、教務、学年主任、生徒指導主事、保健主事からなる企画委員会に提案する。

③指導案検討〔保健指導部（人権推進委員も兼ねる）〕

実施計画提案とほぼ同時に、各学年より 1 名、養護教諭からなる保健指導部で指導案を検討する。

指導案のもとになるのは、白石養護教諭が作成した「性教育マニュアル」だ。各学年、各主題ごとに基本となる指導案や学習プリント、資料に加え、毎年、生徒の感想や教師の反省などを加えていく。

授業中の生徒の反応を見ながら「この部分はなくてもよかった」「この部分はあるといい」という担任の声は大変参考になるそうだ。

また、白石養護教諭は毎年事前に生徒にアンケートをとり、その結果からその年の学年の特徴を分析。各学年の特徴を踏まえながらみんなで話し合い、指導案を練り込んでいく。

④準備・打ち合わせ（各学年会）

授業実践に向けて、各学年会で資料の準備打ち合わせを行い、さらに内容を練り込んでいく。

こうした過程を経て、学活、人権学習、保健体育などの時間を使って T・T による授業（担任・副任、体育教師、養護教諭）実践となる。

よりわかりやすく、生徒が興味を持って授業に取り組むためには、どんな工夫をしているのだろうか。

次号では、白石養護教諭が心がけている指導の取り組み方を紹介する。

（取材・文 中出三重／エム・シー・プレス）

産休取得の政治的効果

サッカー W 杯の日本代表については改めて書く必要もないのだが、直前に監督が交代して「こりゃダメだ」と思っていた分、印象度も高く、話題も多かった。一次リーグで盛り上がった6月には、実はラグビーの日本代表も大いに健闘していた。その活躍も「大迫、半端ない」のあおりを受け、すっかりかすんでしまった印象である。やや場違いになって恐縮だが、この際ラグビーの報告もしておこう。

世界ランク 11 位だった日本代表は、14 位のイタリアと 2 戦して 1 勝 1 敗。さらに同 12 位のジョージアにも快勝し、各国代表の集中対戦月である 6 月を 2 勝 1 敗で勝ち越した。ランクこそ日本が上位だったとはいえ、イタリアもジョージアも決して格下のチームではない。実力は拮抗しているとみられていた。

イタリア戦で僅差の 1 試合を落としたものの、3 試合の総合評価は、2019 年ラグビー W 杯日本大会に向け、進化を実感できる内容だったといえるだろう。

ラグビーの世界ランク 1 位で、畏敬を込めてオールブラックスと呼ばれるニュージーランドは、同 8 位のフランスを自国に迎え、3 連戦を全勝で飾った。国中が沸き返ったことは想像に難くない。だが、そのラグビー王国でも 6 月の最大の話題はオールブラックスの快進撃ではなく、首相の動向だった……長い前振りですいません。ここから本題です。

ニュージーランドのジャシンダ・アーダーン首相は今年 6 月 21 日に女兒を出産し、6 週間の産休に入った。当コラム執筆時点では確認できなかったが、掲載される頃にはもう公務に復帰していることと思う。

報道によると、首相在任中の出産は 1990 年のベナジル・ブット首相（パキスタン）以来 2 人目で、産休取得はアーダーン首相が初めてだという。

これも報道の受け売りだが、ニュージーランドは 1893 年に世界で初めて女性の参政権（選挙権）を認めた国でもある。ラグビーでオールブラックスの呼称が使われ始めるのは 1905 年の英国遠征あたりのようなので、実は屈強のラグビーチームの名声よりも、女

性の政治参加の方が早く定着していたことになる。

女性宰相も昨年 10 月に就任したアーダーン首相が最初ではなく、ジェニー・シップリー首相（1997 年 12 月～1999 年 12 月）、ヘレン・クラーク首相（1999 年 12 月～2008 年）に次いで 3 人目。蛇足ながら付け加えれば、ヘレン・クラークさんは現在、国連開発計画（UNDP）の代表で、2016 年の国連事務総長選にも立候補し、同年 6 月には日本記者クラブで記者会見を行っている。（<https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/33460/report/>）

結果的に事務総長には選ばれなかったが、世界の課題に積極果敢に取り組もうとする姿勢には、会見で司会を担当した私も「この人がいいのではないかと強く感じたことを思い出す。

話を戻そう。産休取得の意向は今年 1 月にアーダーン首相自身が自らの妊娠を発表した当時から明らかにしていたし、産休中はウィンストン・ピーターズ副首相兼外相が首相代行を務めることも決まっていた。

したがって、国民の多くは好意的に受け止め、むしろそうした社会であることを誇りに感じていたように思う。6 週間も首相が不在では危機に対応できないのではないかといった批判もあまり聞こえてこなかった。

考えてみれば、何かの事情で指導者が不在を余儀なくされる事態はいくらでもある。例えば、首相が病に倒れ、入院が必要となることは世界中であったし、亡くなった後でも、ひたすらその事実を隠そうとしたケースもある。

もちろん、健康情報は高度に個人に属するものなので、なんでも公開すればいいというわけではない。

だが、権限の集中を個人にだけゆだねるのではなく、必要な場合は事情を説明しチームとして対応する。こうした在り方も危機管理の観点からは必要だろう。

日本は当面、首相が産休を取るような展開ではないにしても、他の立場の人はどうか。働き方の前提として、少なくとも「当然だよな」と言える程度の社会環境は整えておきたいと改めて思う。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

盛り場に眠る性を掘り起こす

小学校の低学年だった頃の記憶だが、父の背広のポケットにマッチ箱を見つけ、それをなにげなく母に渡した。すると、母の顔が急に陰しくなったのだが、そこに「西川口 トルコ」という文字が入っていたのを子供の目は見逃さなかった。1960年代、父は川口市の零細企業に勤めるサラリーマンだったから、きっと、そんな風俗にも気晴らしに行っていたのだろう。以来、西川口といえばトルコ（現在でいうところのソープランド）というのが私のなかに刻まれたし、実際、西川口はソープ街として世間にも知られていく。

長じて、私は性の問題に関心を持つようになったわけだけれど、西川口は旧中山道にあった色街の伝統を受け継ぐ宿場に違いないと思っていた。ところが、数年前、地元で育った方と話す機会があり、かの地のトルコは高度成長期に田んぼのなかに突然できたものだと聞いてびっくり。調べてみると、鋳物工場などが盛んだった川口の労働者を目当てに作られ、高度成長とともに発展した風俗街、というのが真相らしい。まさにうちの父のような男たちの需要に応えるための街が西川口だったのだ！

前置きが長くなったが、盛り場というのは（よくも悪くも）その時代の性の一面を映す鏡のようなものだ。私たちが暮らし、働き、遊交する街は、ひとの性によっても形づくられ、色づけられている。むしろ性は空間の構成にとってかなり大きな要素である。ということ視覚的に教えてくれるのが本書『新宿・渋谷・原宿 盛り場の歴史散歩地図』だ。昨今、古地図などを探って街を探索することがブームになっているが、こちらは新宿、渋谷、原宿周辺の盛り場の変遷を、歴史のエピソードとともに紹介してくれる。

そもそも新宿は、江戸時代に設けられた宿場だった。



新宿・渋谷・原宿 盛り場の 歴史散歩地図

赤岩州五著
草思社
定価 2000 円＋税

現在の新宿二丁目辺りが発祥で、宿場につきものの飯盛り女といわれた売春婦もいて賑わった。それが遊郭となり、戦後も赤線（青線）として栄え、売春防止法の施行以後、いつしかゲイバー街になった。新宿を形作る原動力は、まさに性そのものであったといっている。

一方、新宿でも歌舞伎町は戦後の盛り場にすぎず、明治の頃などはまだ鬱蒼とした樹木が生い茂り、沼があり、そこから川が流れ出る牧歌的な風景が広がっていたという。現在のような繁華街となったのは、戦後も（二丁目が廃れた）昭和30年代以降というのだから、街は生き物のように変化し、その姿を変える。

また戦後の闇市は新宿から始まったとされるが、その自由でアナーキーな空気の中かで、47年、日本で最初のストリップショウが行われたのもこの街。空襲で焼け残った帝都座（伊勢丹の向かい側）で「ポッティチェリ」の名画に見立てて、裸の女性がこの額におさまるとい趣向だった」。

さて、渋谷の地図では、もはや日本の文化、この国の一大「風俗」といっていいジャニーズ事務所の出発についても、進駐軍の「米軍家族居住地」との関係で触れられている。現在、代々木公園、代々木競技場、NHKがある広大な地域がそれに当てられていて、当時、日系人としてそのなかで働いていた（と思われる）ジャニー喜多川氏が、米軍家族と、近隣住民との交流のための少年野球チームを結成した。そこに近所の代々木中学に通う少年4人が入ったことが、「ジャニーズ」が誕生するきっかけになったという。なんとという地理的偶然！

想像外の事実を知ること、脳内の歴史地図が書き換えられる。性を考える上でも、街の配置から過去を検証することには意味があるだろう。そして土地の古層に眠る性を掘り起こすことで、私たちは人間のグロテスクな欲望を目撃するはずだ。

（作家 伏見憲明）



9月1日(土) 13:30 ~ 16:00



第9回世界性の健康デー記念講演 in 青森

北東北性教育研修セミナー 2018 夏

より安全に、より健康に。セックスワークの現場から

講師 要友紀子 (かなめ・ゆきこ) SWASH 代表

JK ビジネス、AV 出演強要、人身取引、女性／子どもの貧困など、この数年、メディアをはじめ様々な場所で、性風俗について語られ、性風俗で働いている人や、その現場における被害経験を持つ人への働きかけが各所で増えてきています。しかし社会では現状理解を深めることをせず、現に働いている人やこれから働こうとしている人への適切な声がけや、その労働環境への適切な対応ができていない現状も見受けられます。そうした中で、性風俗で働く人々への偏見や差別も多くあり、働く人たちの安全、そして健康が守られていない現状があります。今回、1999 年からセックスワーカー（性風俗で働く人）の安全と健康、権利を守るための活動をしてこられた要友紀子さんをお呼びして、差別や偏見、暴力の無い、「安全 / 健康 / 権利」を守るために私たちの社会は何をすべきかお話いただき、皆さんと一緒に、このまちでできることを考えられたらと思っています。

会場 アピオあおもり 大研修室 1 (青森市中央 3-17-1)

参加費・申込み先等

◇参加費：1000 円 (25 歳未満 500 円)

◇主 催：北東北性教育研修セミナー実行委員会 ◇協 賛：日本性教育協会

◇申込先：rc-net@goo.jp メール、または郵送で青森県青森市安方 1-3-24 北東北性教育研修セミナー実行委員会へ
氏名 / 連絡先 / 所属先 (ある場合) を明記して。

9/2 (日)

10:00 ~ 16:30

第9回世界性の健康デー記念イベント 2018 in 東京

東京性教育研修セミナー 2018 夏

**Sexual Health & Sexual Rights are FUNDAMENTAL ! For well-being
性の健康・性の権利は健やかに暮らす基本です！**

内 容

★「秋の Sexual Health 文化祭！」(10:00 ~ 16:00) 会場 3F

・グッズ展示、ゲームコーナーなど、性にまつわる活動をする人々たちによるブース出展

★「ディスカッション『性の権利宣言』を知っていますか？」(13:30 ~ 16:30) 会場 2F ホール

・「性の権利宣言」とは？

講師：早乙女智子 (WAS 学術委員会委員、主婦会館クリニック産婦人科、世界性の健康デー東京大会実行委員長)

・いろんなひとに、聞いてみた！ 街頭インタビュー Movie

・会場ディスカッション (モデレーター：Link-R 代表・柳田正芳)

会場 ルークホール (東京都新宿区四谷 1-7 持田製薬本社ビル内)

参加費・問い合わせ先等

参加費／一般 1,500 円 学生 1,000 円 (学生証持参) ※ 18 歳未満の人 (18 歳になった高校生含む) は、保護者同伴のこと。

定 員／150 名 締 切／8 月 25 日 (当日参加は残席次第のため、事前申し込みをお願いします)

主 催／世界性の健康デー東京大会実行委員会 協賛／日本性教育協会

問合せ・申込み先／<http://wshd.jp/tokyo2018regi>

9/22 (土)

13:00~17:00

第19回日本性科学連合(JFS)性科学セミナー

今こそ活かそう！ 性科学の知識

内 容

- ①「性科学の知識を駆使して悩みを解決する」北村 邦夫（一般社団法人日本家族計画協会）JFPA
- ②「知識は力になる」正確な性の知識を学校現場にどのように伝えていくか」秋元 義弘（岩手県立二戸病院 産婦人科 / 臨床検査科）JSA
- ③「やまとことばの中の性」早乙女 智子（京都大学大学院〈医学研究科客員研究員〉）JASE
- ④「梅毒について（仮）」石地 尚興（慈恵医科大学 皮膚科学）JSSTI
- ⑤「陰毛脱毛の捉え方と性」丹羽 咲江（咲江レディスクリニック）JSSS
- ⑥「知ってる？ 膣内射精障害～大規模インターネット調査の結果を交えて～」小堀 善友（獨協医科大学 埼玉医療センター 泌尿器科 / リプロダクションセンター）JSSM ほか

会 場

中日パレス
（名古屋市中区栄 4-1-1 中日ビル 6 階）

参加費・問い合わせ先等

参加費／3,000 円（学生 1,000 円）、性科学セミナー＋日本性科学会学術集会（22 日・23 日両日参加）7,000 円（学生 2,000 円）、性科学セミナー＋日本性科学会学術集会合同懇親会（22 日 17:30～）3,000 円
大会事務局／エスエル医療グループ すぎやまレディスクリニック（〒460-0004 愛知県名古屋市中区新栄町 1-3 日丸名古屋ビル 3 階）
TEL052-971-0930 FAX052-971-0935
問合せ先／日本性科学連合（JFS）事務局（〒113-0033 東京都文京区本郷 3-2-3-4F 日本性科学会内）
TEL：080-1242-5025 FAX：03-3396-8226 E-mail：info@jfs1996.jp URL：http://www.jfs1996.jp
※翌23日（日）は同会場にて第38回日本性科学会学術集会「次世代につなぐ性科学」が開催されます。



11月3日（土・祝日）13:00～16:30



東京HIVと性の教育セミナー2018／東京性教育研修セミナー2018

HIV と性の教育 UPDATE！

いまどきのエイズ・性感染事情と新たな取り組み

内 容

文部科学省がなんと 17 年ぶりに「教職員のための指導の手引き」を改訂しました！

プログラム 1 性教育の UPDATE ～それぞれの立場から

- 改訂委員の立場から——池上千寿子
改訂の背景、改訂のポイントと課題—教育現場では何をいかに UPDATE すればよいのか？
- 当事者・外部講師の立場から—加藤力也
子どもたちに伝えたいこと——ゲイ、HIV 陽性者として子どもたちに語った経験から
- 支援者の立場から—生島 嗣
学校教育の落とし穴、LGBT の性の健康——性の健康の啓発と調査活動の現場から見えてくる現状と課題

プログラム 2 グループワーク～「手引き」の活用と工夫について意見交換

会 場

日本性教育協会セミナールーム（東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B 1）

参加費・問合せ先等

主 催：特定非営利活動法人ぶれいす東京 協 賛：日本性教育協会

参加費：1000 円（「手引き」付き）・定員 30 名

対 象：教育現場で性教育／保健教育を実践している方、教職員、養護教諭、保健師、助産師など

問合せ先：「ぶれいす東京セミナー係」Eメール：office@ptokyo.org TEL03-3361-8964

東京性教育研修セミナー 2018

主催 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会
「第8回青少年の性行動全国調査」委員会

●若者の性行動はさらに消極化へ!!

青少年の性行動の不活発化と多様性

～「第8回 青少年の性行動全国調査」からみえてくる若者像～

日本性教育協会(JASE)では、1974年よりほぼ6年おきに全国の青少年の性行動・性意識について調査してきた。今回は2017年度に行われた第8回調査の分析をもとに、性行動と性意識など青少年の性の実態の現状を報告する。そのなかで、この43年間における性行動の変容、生活環境の変化と交友関係のあり方、性的被害や性教育・性知識の受け止められ方などについて検討を行う。

また、日本とほぼ同一の質問紙で調査された中国の青少年の性行動・性意識の実態も報告する。

基調講演 第8回 青少年の性行動全国調査の概要

片瀬 一男 (東北学院大学教養学部教授)

講演① 青少年の性はどう変わってきたか
～性行動・意識の消極化と分極化
林 雄亮 (武蔵大学社会学部准教授)

講演② 性行動と性規範・ジェンダー規範の関連性を探る
石川 由香里 (活水女子大学健康生活学部教授)

講演③ 青少年の性暴力～現状をとらえる方法
羽瀨 一代 (弘前大学人文社会科学部教授)

講演④ 性教育はどう役に立っているのか～性に対する態度と知識
永田 夏来 (兵庫教育大学大学院学校教育研究科講師)

特別講演 中国／北京・上海・広州の青少年の性意識と性行動調査

楊 雄 (上海社会科学院社会学研究所所长)

裘 曉蘭 (上海社会科学院社会学研究所研究員)

ディスカッション・Q&A

若者の性行動は日本・中国でどう変化してきたか?

座長・加藤 秀一 (明治学院大学社会学部教授) + 上記7名

2018年
(金・祝日)
11月23日
13:00～17:20
(受付12:30)



会場 **一ツ橋センタービル 12階** (東京都千代田区一ツ橋 2-4-6)

東京メトロ半蔵門線／都営新宿線／都営三田線「神保町」駅
A8出口 徒歩1分

対象 教育、保健、看護、医療関係者、学生、「性」「性教育」「セクソロジー」に関心のある方。

参加費 1,000円 (当日受付でお支払いください。資料代含む)

申込 JASEウェブサイトの申込ページ
<http://www.jase.faje.or.jp/support/jasstokyo.html>
のフォームからお申込みください。

定員 100名 (先着順・予約制)



至 JR 水道橋駅 東口より徒歩 15 分



至竹橋駅 徒歩 8 分

JASE 一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会事務局
〒112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビルB1
(お問い合わせ電話) 03-6801-9307

若者の性にかかわる行動、規範意識、情報源などが、
この6年間でどのように変容したかがわかる。
若者の性を理解するための必須の資料！

緊急出版 !!

全国調査による
最新のデータ

青少年の性行動

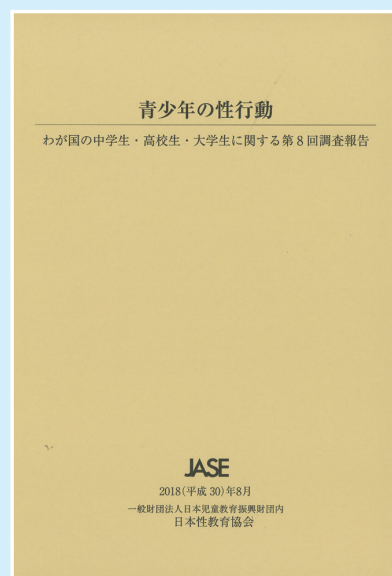
わが国の中学生・高校生・大学生に関する第8回調査報告

編集／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）
「第8回青少年の性行動全国調査」委員会

日本性教育協会では、1974年に第1回調査を開始し、以来ほぼ6年ごとに「青少年の性行動全国調査」を行ってきました。日本の青少年の性行動や性意識の変化が全国規模で把握することができる貴重な調査データとして国内はもとより国際的にも認知されています。

このたび、2017年6月から同年12月にかけて実施した「第8回青少年の性行動全国調査」の単純集計がまとまりましたので、一次報告として刊行しました。主要な結果「デート経験」「キス経験」「性交経験」などの解説と、全質問の中学生・高校生・大学生の男女別集計結果が掲載されています。

※なお、今回の調査に詳しい分析を加えた報告書『若者の性』白書 第8回青少年の性行動全国調査報告（仮題）』につきましては、2019年刊行予定です。



A4判 80ページ

頒価：1,000円

送料は別途。詳しくはJASEウェブサイトを確認してください。

JASE ウェブサイトよりお申し込みいただけます！

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/seikoudou8.html>

※インターネット環境にない場合は、JASE(電話 03-6801-9307) までお問い合わせください。



●本書に関するお問い合わせはにつきまして、下記までお願いいたします。

一般財団法人 日本児童教育振興財団内 日本性教育協会（JASE）

〒112-0002 東京都文京区小石川 2-3-23 春日尚学ビル B1

TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478

Mail info_jase@faje.or.jp URL <http://www.jase.faje.or.jp>

JASE